

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II  
Japanese Studies

---

Thursday 3 June 2010

09.00 – 12.00

---

**J.12 JAPANESE TEXTS, 1**

Candidates should answer **both** questions in Section A and **one** question from section B.

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Section booklet.*

**STATIONERY REQUIREMENTS**

20 page Answer Book x 1  
A Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator

## SECTION A

Candidates should answer BOTH questions:

- 1 Translate into English: [35 marks]

目にしているのは都市の姿だ。

空を高く飛ぶ夜の鳥の目を通して、私たちはその光景を上空からとらえている。広い視野の中では、都市はひとつの巨大な生き物に見える。あるいはいくつもの生命体がからみあつて作りあげた、ひとつの集合体のように見える。無数の血管が、とらえどころのない身体の末端にまで伸び、血を循環させ、休みなく細胞を入れ替えていく。新しい情報を送り、古い情報を回収する。新しい消費を送り、古い消費を回収する。新しい矛盾を送り、古い矛盾を回収する。身体は脈拍



question continues...

のリズムにあわせて、いたるところで点滅し、発熱し、うごめいている。時刻は真夜中に近く、活動のピークはさすがに越えてしまったものの、生命を維持するための基礎代謝はおとろえることなく続いている。都市の発するうなりは、通奏低音としてそこにある。起伏のない、単調な、しかし予感をはらんだうなりだ。

私たちの視線は、とりわけ光の集中した一角を選び、焦点をあわせる。そのポイントに向けて静かに降下していく。色とりどりのネオンの海だ。繁華街と呼ばれる地域。ビルの壁面に取り付けられたいくつもの巨大なデジタル・スクリーンは真夜中を境に沈黙に入るが、店頭のスピーカーはまだヒップホップ・ミュージックの誇張された低音をひるむことなくたたき出している。若者たちで混み合つた大きなゲームセンター。派手な電子音。コンパ帰りらしい大学生のグループ。髪を明るい金髪に染め、ミニスカートの下から、健康な両脚をむき出しにした十代の女の子たち。最終電車に乗り遅れないように、急ぎ足でスクランブル交差点を渡っていくサラリーマン。しかしこの時刻になつても、カラオケ店の呼び込みは相変わらずにぎやかに続いている。派手な外装を施した黒のワゴン車が、街の品定めをするようにゆっくりと通りを流している。真っ黒なフィルムが貼られた窓ガラス。それは深海に生息する、特別な皮膚と器官をもつた生き物を思わせる。二人組の若い警官が緊張した面持ちで同じ通りをパトロールしているが、彼らに注意を払うものはほとんどない。この時刻の街は、街そのものの原理に従つて機能している。季節は秋の終わり。風はないが、空気は冷ややかだ。あとの少しで日付が変わろうとしている。

血管 vein, artery

とらえどころのない slippery, elusive

細胞 cell

うごめく squirm, wiggle

代謝 metabolism

うなり beat, boom

奏でる play (music)

皮膚 skin

器官 organ (of the body)

Murakami Haruki, *Afutā dāku* (2006), p. 5-7.

(TURN OVER)

2 Translate into English: [35 marks]

**変わるワシントンD.C.の風景**

米国の首都ワシントンD.C.が米国の国内政治の観点からも、対外関係の観点からも、重要な役割を果たしていることはよく知られている。世界の超大国の中核を担うホワイトハウス、国際政治を取り仕切る国務省、五角形のユニークな建物からもその世界的影響力が感じられる国防総省、その他多くの政府機関が町の中に散在する。加えて、民主主義のプロセスの中核的な活動を開き、国際社会への影響力を發揮してきた連邦議会が議事堂を中心威容を示している。ワシントンD.C.は、たしかに威厳に満ちた、しかし魅力的な町である。

ただ、私が頻繁に足を運ぶようになった一九六〇年代半ばは、それでも静かな町であった。レスト

日本安定した関係の基礎には、幅広い指導者層の交流の蓄積がある。  
しかしま、この「目に見えない」貴重な外交資産が失われつつある。もう一度、その重要性に目を向けてみたい

日本国際交流センター理事長 山本 正

# 日本の不在

## 今こそ必要な人的ネットワーク

question continues...

な政策論争や政策形成にとっての重要なハブの役割を強めるようになってきたのである。

このような新しい展開を象徴的に示してきたのが、相当数の民間のシンクタンクがワシントンD.C.を本部や支部として積極的な活動を展開するようになったことであるが、そのなかでも外交関係のシンクタンクの活動が顕著である。外交的な課題が複雑で多様なものになり、政府間の協力がこれまで以上に重要なとともに、これらシンクタンクの役割も重視されるようになつた。共同研究活動、セミナー、国際会議などには、米国のみならず、海外の政府関係者も招待されている。また、いくつかの国は、政府関係者を研究フェローとしてこれらワシントンのシンクタンクに派遣するようになつてきている。

シントンのシンクタンクに派遣するようになつてきている。このような流れは、米国と主要国家の間の政策レベルでの情報交換、知的政策対話、共同研究、人的ネットワークの形成に大きく役立つており、それがさらにシンクタンクの機能を一層強化することになつてきる。それだけではない。連邦議会の議員やスタッフなどと主要諸国会議会関係者との交流活動も主要諸国において重要視され、これら多様な分野の関係者のワシントンD.C.への訪問も年々増えてきた。

### 「効率」を長期的に考える

このようなワシントンD.C.で特に顕著に見られる米国や国際社会のダイナミックな流れに接するにつけても、近年、日本の存在感がきわめて希薄になりつつあることが気になる。日本の外交力の強化、共通の地球的課題への協力の促進、日米関係を中心とする対外関係推進のインフラの構築などの観点から大いに懸念されるのである。このような傾向をより詳細に把握するため、日本国際交流センターでは、「政治的変化のなかでの日米政策対話の再活性化」をテーマに研究調査を実施している。これを通じて、上記の日米間の政策対話・交流の低迷ぶりとその原因を垣間みることができる。

蓄積  
効率

stock, accumulation, reserve  
efficiency

Yamamoto Tadashi, 'Nihon no fuzai,' *Gaikō Fōramu* (January 2010), pp. 18-19

(TURN OVER)

## SECTION B

Candidates should answer ONE of the following two questions taken from unseen texts:

- 3 Translate into English: [30 marks]

最近、テレビニュースに現れる麻生総理のスピーチに気に入る点が現れた。語尾を伸ばす癖が顕著になつたのである。「その点についてえー、一方的にいー」という感じの間延びがしている。

総理ともあろう人なら、喋る時、問題点の背後にはつきりとした実現可能な政策に対する信念を持っていること。もう一つは、その内容を自分の中に整理して蓄積しており、短時間のうちにできるだけ多く相手に伝える機能。この二つくらいは最低限要求されるだろう。

総理の日本語力の不足は、社会に大きな一石を投じた。一時代前だつたら、あれは指導者として大きな恥だが、日本語が既に崩壊しかかっていることの危機を見せつけたという点では功績である。自国語が絶えず研鑽されて保たれるという努力を失つた国に、文化が栄えるわけはない。総理の軽薄さは、国語力がなかつたことより（漱石鷗外の時代からみると、私なども作家でありながら漢字の知識の浅さに赤面しなければならない）、マンガ好きの若者たちを持ち上げたことだ。

日本の若者たちは、日本人なのだから当然日本語を使えると

question continues...

私たちは思つてはいるが、実は長い年月、きちんとした表現の方法を学んで来なかつた。それは学校の責任でもあろう。

「私があ、その時にいー、いたもんですからあー」式の語尾の強め方が一時目立つたのは、先生たちが、語尾をはつきりと言えと強制したからなのだが、心理学的に相手の同意を求める自信のなさの表れだという考え方もある。麻生總理も、あの手の教育を受けた世代なのかもしれない。

現代の日本人はもはや読み、書き、会話を駆使できる日本語の使い手ではなくなつてはいる。その理由は私には明瞭だ。まず人間と、その人間が引き起こす事象に対する興味がない。子供の時から機械とばかり遊んでいるから、人間同士が心に立ち入る行為の楽しみも苦しみも知らない。家庭内でも、親と子の会話の機会が極度に減つている。そうした精神的に貧しい生活は、語るに十分な内容の発見とその表現力の双方の訓練を怠り、人間関係に慎ましさという名の緊張も持たない人が増えた結果である。言語が崩れたということは、日本人の精神性の内部崩壊がかなりの程度進んでいるということだ。そこへ持つて来て、総理の「マンガのすすめ」である。

麻生	Aso
蓄積	accumulation, store
喋る	to speak
研鑽	study
怠り	neglect

Sono Ayako, 'Kashikoi kokumin no osanai kokka, *Sapio*, (January 28, 2009), p. 1-2.

question continues...

(TURN OVER)

## 反ユダヤ主義とシオニズム

キリスト教徒が全人口の一%、ユダヤ教徒は皆無に近いという日本社会では、ユダヤ人に対する平均的知識水準は「ヴェニスの商人」に登場する商人シャイロックの範囲にすぎなかつたと思われる。

強欲な金貸しシャイロックが美女ポーサヤの機智にへこまされるシェークスピア劇は菊池寛の「父帰る」と並んで、大正の頃から女学校の学芸会における人気作品ではあつたが、身辺にユダヤ人の影も見ないわが国では、実感の伴わぬ西洋のオトギ話にすぎなかつた。一般庶民の場合はなおさらで、知らないものに偏見の生まれる余地はなかつた。この点、キリスト教が育んだ伝統感情のなかで、ユダヤ人ととの身近な接触を持ちつけた欧米人にとって、シャイロックのイメージがユダヤ人一般のイメージに拡大し、偏見を固定させる役割を果たしたのとは根本的な相違であろう。

そもそも、ダビテ大王やソロモン王の繁栄を誇った古代ユダヤ王国が、ローマ軍にエルサレム神殿を破壊されたのは、紀元七〇年のことである。亡国のユダヤ人たちは世界中に離散（ディアスポラ）したが、それ以来二千年、彼らは至るところで差別され、迫害されつづけた。

では、こうした差別や迫害を正当化したいわゆる反ユダヤ主義（anti-semitism）は、何を根拠にしていたのだろうか。一般には(1)キリスト教社会によってユダヤ教徒が宗教上の異端者とみなされたこと、(2)流浪しつつも固有の信仰、風習を頑なに守ってキリスト教社会に同化しなかつたこと、(3)商業、金融業を得意としたユダヤ人への職業上の偏見——などが指摘されている。

いずれも、根拠のあやふなものばかりで、局外者から見ても反論は容易だが、問題は異教徒、異人種間の共存が曲がりなりにも実現していく潮流のなかで、反ユダヤ主義がナチ・ドイツによる絶滅政策に行きつくまでエスカレートした点にあろう。

「イエス・キリストを売ったのはユダヤ人だ」、「しかしキリストはユダヤ人ではないか」に始まつて、非同化的性格や職業選択についても、差別や迫害の原因なのか結果なのか、卵と鶏のいづれが先かの論議に似て、決め手がない。

十九世紀末から高まつたシオニズム運動と反シオニズム運動の相克は、結果的にイスラエル独立と六百万人のホロコーストをもたらしたが、やはり因果関係は判然としないままである。

菊池寛	Kikuchi Kan, a writer	機智	wit, resourcefulness
おとぎ話	fairy tale	迫害	persecution, oppression
あやふや	hazy, unclear	流浪	wander, roam

Hata Ikuhiko, *Showashi no nazo o ou*, Bunshunbunko, (1999), p. 254-56.

END OF PAPER